

読解力の育成を重視した小学校保健授業の効果

－「生活習慣病の予防」をテーマとして－

長田 洸子（宇都宮大学）

1. はじめに

近年、変化の激しい現代社会を生き抜くための汎用的な資質・能力の一つとして、読解力が重視されている。本研究では、読解力の育成が子供たちの健康の保持増進のための実践力向上にも貢献すると考え、読解力の向上を重視した小学校体育科保健領域の授業を開発・実践し、その効果を検討した。

2. 研究方法

本研究では、小学校の体育科保健領域の内容のまとめ「病気の予防」（8時間構成）の3時間目に当たる「生活習慣病の予防①」を実践授業とした。その際、読解力の育成を促すために、血管模型や生活行動パターンの提示資料等の多様なテキストから情報を読み取ったり関連付けたりして、根拠を基に自分の考えを説明する活動を取り入れた（表1）。

表1 授業の概略

学習活動	読解力育成の視点
1.血管模型AとBの比較	【情報の取り出し】
2.本時のめあての確認	
3.生活習慣病の原因の予想 ・生活行動パターンの提示資料から原因となりそうな行動を挙げる	【熟考・評価】
4.生活習慣病の原因の理解 ・スライド資料から原因を理解する	【解釈】
5.生活習慣病を予防するために有効な全身を使った運動を考える ・タブレット端末で意見共有をする	【ICT機器の活用】
6.生活習慣病予防のための生活行動を考え、その理由を説明する	【情報の利用】 【表現】
7.本時のまとめ	

授業は、公立小学校3校の6年生6クラス計182名を対象に実施した。授業者は、対象学級の担任教師が担当した。

授業の効果は、授業のプロセスについて、①各学習活動におけるワークシートへの記述内容の整理、②保健授業の学習過程評価票（植田，1998）による評価、③読解力育成のための教材や指導法の有効性の主観的評価を行った。また、学習内容の習熟度について、①生活習慣病の予防に関する知識、②生活習慣病の予防に対する自己効力感の調査を授業の実施前後で行い、正答率や肯定的な回答の割合を比較して検討した。

3. 結果および考察

1) 授業のプロセスの評価

各学習活動におけるワークシートへの記述について、多くの児童が多様なテキストから必要な情報を

選択したり関連付けたりし、根拠をもって考えを表現することができていた。

学習過程評価票について、「はい」と回答した者の割合は、「協力」領域56.6～84.1%、「認識」領域85.2～98.4%、「興味・関心・意欲」領域69.2～79.7%、「自己学習」領域39.6～93.4%であったことから、授業としての有効性が概ね確認された。

読解力の育成活動に対する主観的評価項目に「はい」と回答した者の割合をみると（表2）、4項目中全ての項目で90%程度もしくはそれ以上であったことから、血管模型や生活行動パターンの提示資料等の教材を用いた学習活動によって、多様なテキストへの対応、情報の選択、情報同士の関連付け、情報を活用した表現などが促されていたと考えられる。

表2 読解力の育成活動に対する主観的評価項目に「はい」と回答した者の割合

読解力育成の視点	質問項目	(%)
【情報の取り出し】	血管模型により、血管の状態について理解できたか	100.0
【解釈】	生活行動パターンの提示資料から、病気の原因を具体的に考えることができたか	96.7
【ICT機器の活用】	タブレットで自分の意見や考えを積極的に出せたか	89.6
【情報の利用】	最後の課題で、授業で学んだことを生かして書けたか	95.1
【表現】		

2) 学習内容の習熟度の評価

生活習慣病の予防に関する知識について、「生活習慣病に含まれる病気」「日本における死因の割合」「生活習慣病になりうる食事」「生活習慣病予防に有効な運動」「生活習慣病予防に有効な生活行動」の全5項目で正答率が授業前後で有意に向上しており、生活習慣病の予防に関する基礎的な知識が習得されたことが示唆された。

生活習慣病の予防に対する自己効力感について、予防のために「適切な食事が摂れるか」「運動を取り入れられるか」「有効な生活行動を続けられるか」の全3項目で肯定的回答の割合が授業前後で有意に向上しており、学んだことを生活場面において実践することへの自信を高めることができていた。

4. まとめ

読解力育成の視点から、多様なテキストを用いた教材や、それを基にした思考・表現活動を取り入れた保健授業により、学習内容に関する知識の習得、望ましい保健行動の実践に対する自己効力感の向上に一定の効果が認められた。